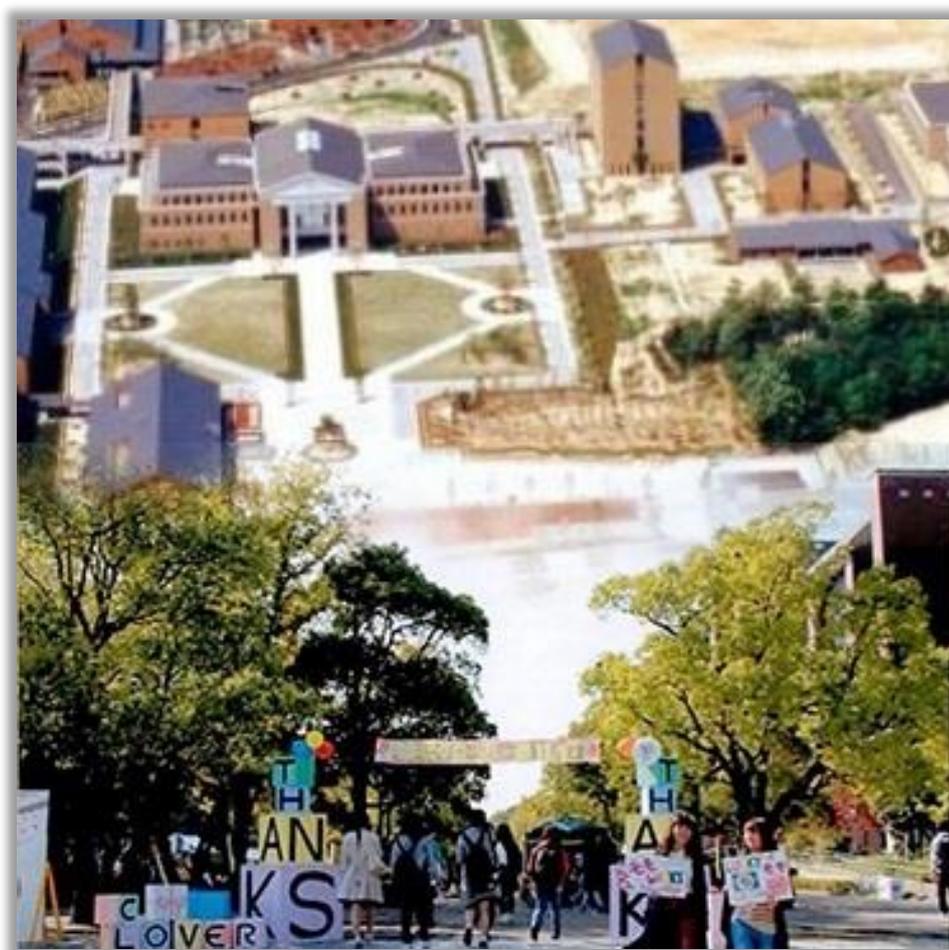




同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第 13 期展
「同志社の GLOCAL—京田辺とのあゆみ—」



〔開催概要〕

同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第13期展

「同志社のGLOCAL—京田辺とのあゆみ—」

会期：2021年9月17日～2022年3月中旬

会場：同志社京田辺会堂光館ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）

主催：同志社大学キリスト教文化センター

協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：開校直後の京田辺校地 1986年、京田辺校地開校30周年記念同志社クローバー祭ゲート 2016年

ごあいさつ

同志社京田辺会堂（「言館」[KOTOBA-KAN]＋光館[HIKARI-KAN]）が献堂された2015年度より、同志社社史資料センターの協力を得て、光館ラウンジで1年に2度（春学期と秋学期）の企画展示を行っています。本来ならば、この秋学期は第14期の展示となるはずでしたが、第11期の展示期間である昨年度春学期に、新型コロナウイルス感染症拡大予防のためキャンパスへの入構制限が実施されたことから、秋学期も同じ展示を引き続き行いました。1年を通じて同じ展示内容となったわけです。そのため、今年度春学期の展示は第12期、この秋学期は第13期となります。

今回のテーマは、「同志社のGLOCAL－京田辺とのあゆみ－」です。GLOCALとは、GLOBAL（地球規模の、世界規模の）とLOCAL（地方の、地域的な）を掛け合わせたもので、LOCALの語がそのまま使われているが、GLOBALとは一字しか違わない、よく出来た造語です。これには「地球規模の視野で考え、地域視点で行動する」(Think globally, act locally)という考え方が示されているようです。春学期の展示テーマは「新島襄のGO GLOBAL－海を越えて－」でしたから、今年度の二つ展示は合わせると＜GLOBALからGLOCALへ＞といった流れになります。

今回の展示は、「発展の地・今出川」と「躍動の地・京田辺」の二部構成です。展示テーマにありますように、とりわけ同志社と京田辺の関わりについて知っていただきたいと思います。京田辺キャンパス（最初は田辺キャンパス）は1986年に開校されましたが、同志社と京田辺の接点はこの時が最初ではありません。驚くことに新島襄まで遡ることができます。1882年4月30日に、現在の京田辺キャンパスの近くに南山義塾という名の私塾が開校され、この開講式に新島は出席し祝辞を述べているのです。今回の展示ではその草稿を見ることができ、そこには教員としてのあるべき姿、学生の心得、生徒の父兄のあり方が記されています。約10年間の海外での生活を終え日本に戻り、同志社英学校を創立した新島は、当時京田辺にあった私塾をも支援していたわけです。GLOBALな経験を土台にした新島のLOCALな活動のひとつです。GLOCALは、新島襄を表すに最もふさわしい言葉のように思います。

この展示を契機に、同志社大学のキャンパスがある場所・地域についての興味関心が高まることを期待しています。そして今後、同志社大学と地域との連携がこれまで以上に強固なものなることを願っています。

キリスト教文化センター所長
越後屋 朗
2021年9月17日

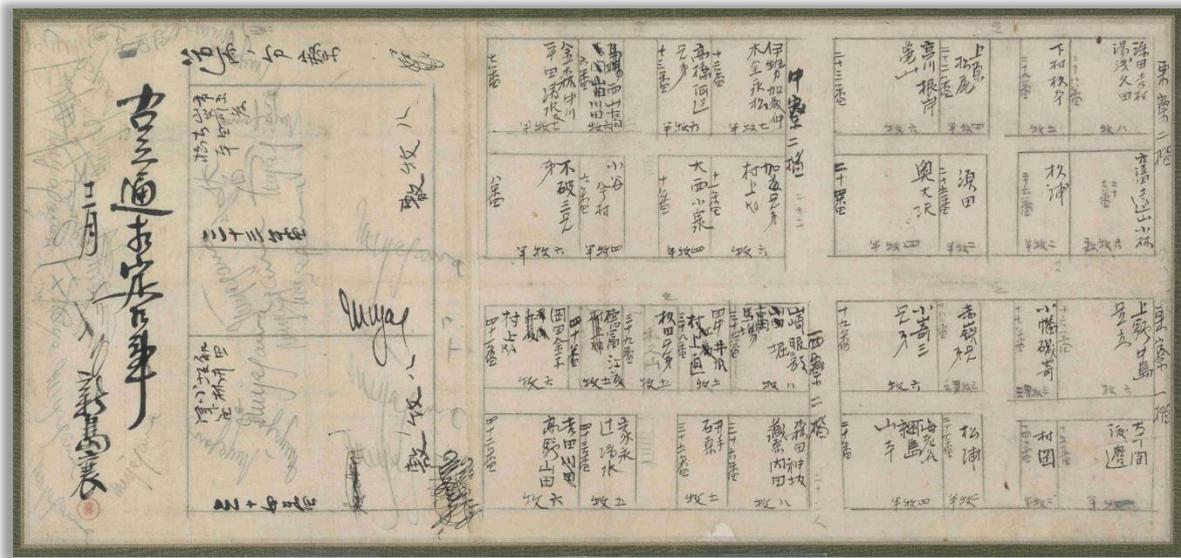
目次

ごあいさつ.....	1
展示テーマ「発展の地・今出川」.....	3
展示テーマ「躍進の地・京田辺」.....	12
資料リスト・写真リスト.....	21

展示テーマ

「発展の地・今出川」

1875年（明治8）11月29日、新島襄は、丸太町寺町上ル松蔭町にあった高松保実邸（現在の新島旧邸がある場所）を借りて同志社英学校を開校しました。その1年後、1876年（明治9）には、今出川の地に英学校を移転します。この今出川が現在の同志社の基礎を固め、成長を約束した場所でした。ここでは、同志社の教育理念をあらわす資料と共に、念願の高等教育機関を備えた学校となる経緯をあらわす資料を展示します。



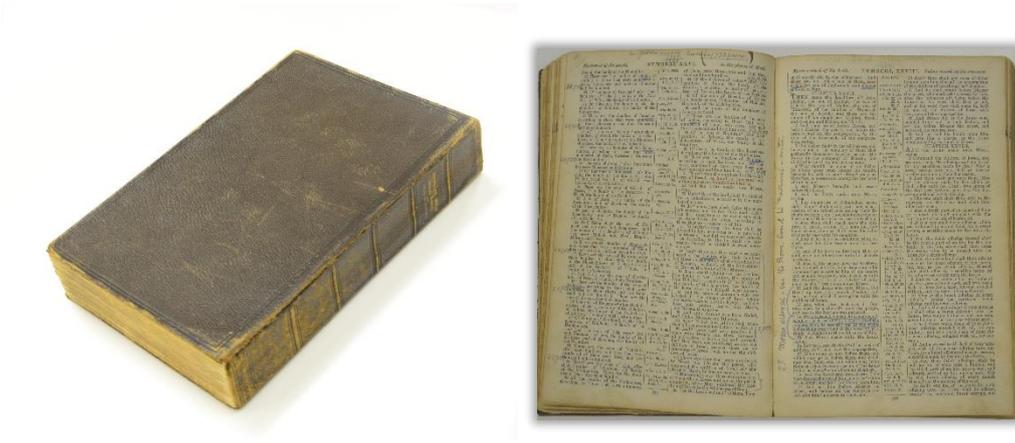
寄宿舍部屋割図 (複製) 1870年代後半 1巻 24.5×53.2cm

同志社英学校開校後の間もない時期（1870年代後半）に作成された寮の部屋割図、もしくはその案と考えられます。当時同志社に通う学生は京都市内に親類が住む場合を除き、原則的に入寮することになっていました。開校当初の生徒数は8人と言われますが、開校3年後には在籍者が105人に増加しています。この部屋割図が作成された頃には、在校生の増加に伴い、最初に建築された第一寮と第二寮以外にも新築の寮が建設されていたことがわかります。



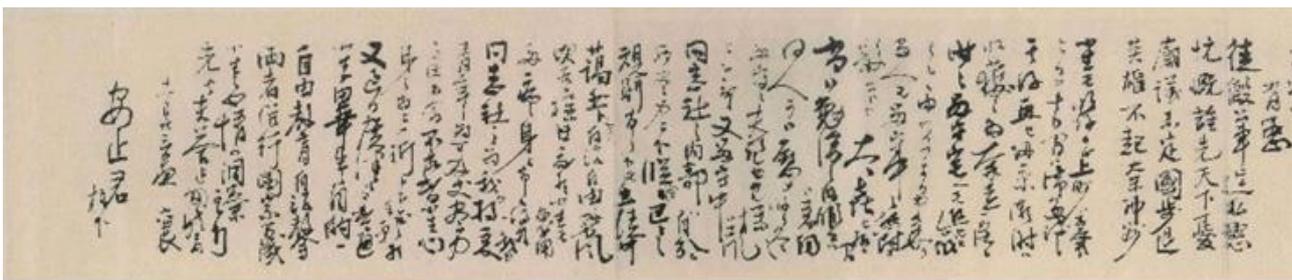
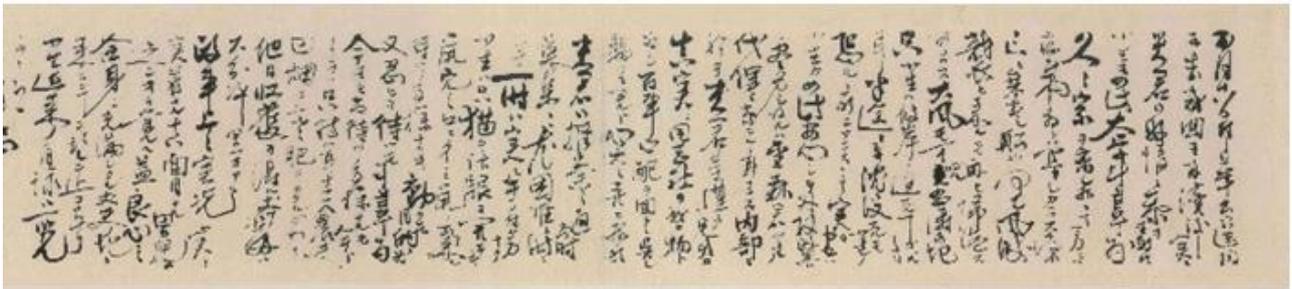
自責の杖 (複製) 明治時代 3点 最大60cm

打掌で折れたとされる新島の杖です。1880年（明治13）4月、当時2年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内ストライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月13日の朝礼の席で、一連の騒動は学生や幹事の責任ではなく、校長である自分の責任であるとして自らの掌を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰に係わる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれています。



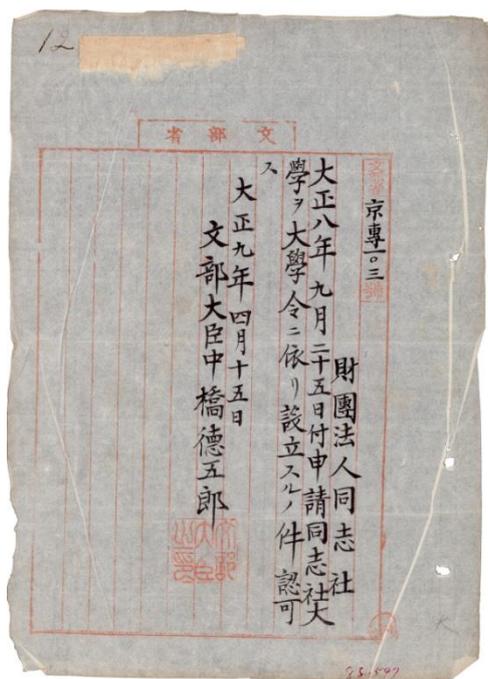
新島襄旧蔵聖書 (複製) 年不詳 1冊 21×14cm

新島がアメリカに到着した翌年に、ハーディーが後見人を務めていた J.M.シアーズ (Joshua Montgomery Sears, 1854～不詳) より贈られた英訳聖書です。手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。同志社は新島の在世中から自然科学や社会科学の専門学校を次々と開校させますが、その大前提としてキリスト教を徳育の基本としていました。この聖書は、同志社のキリスト教主義の歴史と重要性を示す資料のひとつです。



横田安止宛新島襄書簡 (複製) 1899年11月23日付 1通 18×169cm

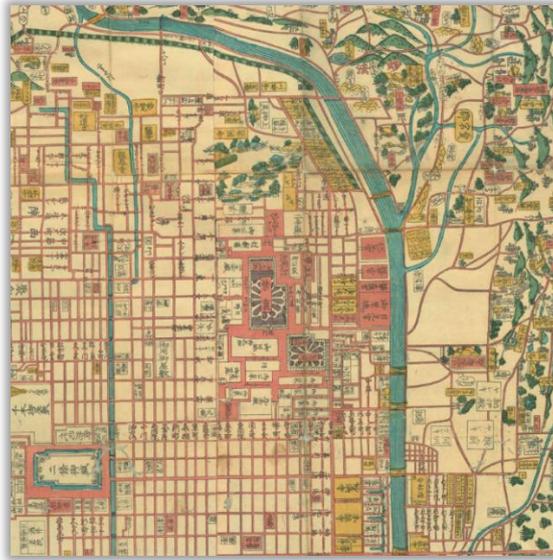
新島が1889年(明治22)11月23日、療養先の東京から同志社普通学校5年生の横田安止に送った手紙です。新島は憲法が公布され、国会開設を間近に控えた国家がどうあるべきかを手紙で語っています。また、この文中に、「良心」を表象する一文「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」があります。新島の教育理念の象徴であるこの文言は、現在石碑に刻まれ「良心碑」となり、同志社諸学校や、新島の母校であるアメリカのフィリップス・アカデミーなどに建立されています。



大学令による同志社大学設立認可証 (複製) 1920年4月15日 1枚 27.8×19cm

1919年(大正8)施行の大学令によって、その翌年1920年(大正9)に法的に認められた大学として認可されたことを示す認可証です。同志社大学は、該当の法令によって認可を受けた日本で3番目の大学です。なお、最初に同志社大学を名乗ったのは、専門学校令による同志社大学開校の認可を受けた1912年(明治45)でした。

<幕末の今出川周辺>



「文久改正新増見京絵図大全」部分 1863年 国立国会図書館デジタルコレクションより借用

現在の今出川キャンパスは、幕末には薩摩藩邸や公家屋敷が並ぶ場所でした。そして、その北には京都五山第2位の相国寺が、南には禁裏御所と公家屋敷が並ぶ、日本の伝統文化を象徴する空間（現在の京都御苑）でもあります。同志社はこのような特異な場所に1876年（明治9）キャンパスを構えることになりました。

同志社が開校する6年前、江戸から明治へ年号が変わる時に京都の町に大きな変化が起こります。象徴的な変化は1869年（明治2）東京奠都（明治天皇の東京行幸）です。これにより禁裏御所とその周辺の公家屋敷の多くは空き家となり、かつての優雅さを失っていきます。また、京都の寺院も明治新政府の土地と人民整理政策の影響を受け、弱体化していきます。そのような周囲の状況下でキリスト教主義学校として同志社はこの地に移りました。

<開校当初の今出川キャンパス>



今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮



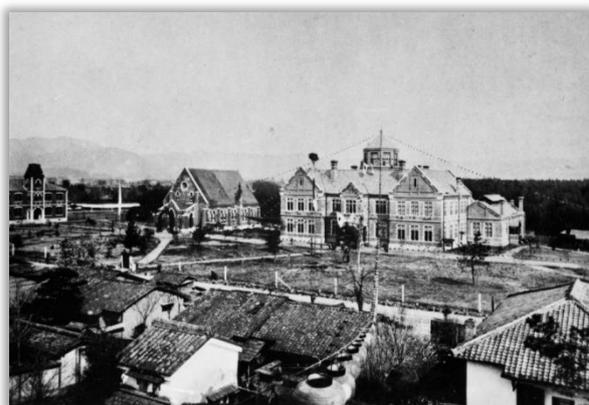
薩摩藩邸跡碑

新島襄は1843年（天保14）江戸城東側にある安中藩邸で生まれました。以来、21歳の時に函館に行くまで、この場所を主に生活の拠点としています。この間、新島は漢学や書、絵、蘭学そして、自然科学も学びました。なかでも、江戸の築地にあった軍艦操練所で、約2年間航海に必要な算術を中心とした自然科学を学びました。

<明治20年代の今出川キャンパス>



明治中期の今出川キャンパス



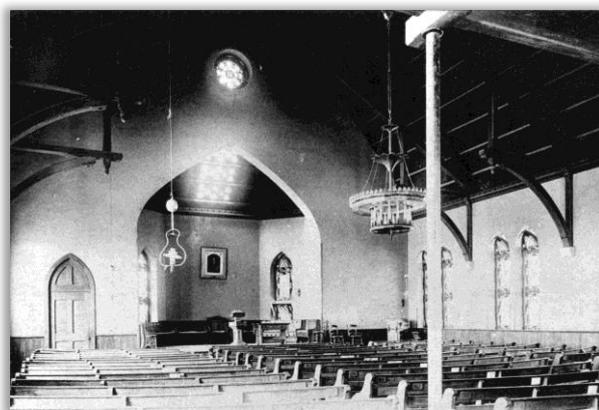
ハリス理化学校開校日の今出川キャンパス 1890年

明治20年代に入ると、キャンパス内には次々と教室棟や寮が建設され、学校として質的量的に拡大していきます。1887年（明治20）には書籍館（現・有終館）の開館式が挙行され、新島永眠後の1890年（明治23）には、ハリス理化学館が竣工し、理化学教育の拠点が完成します。1893年（明治26）にはクラーク神学館が竣工し、さらにこのころ同志社徽章が正式に定められました。

<同志社礼拝堂>



竣工当時の同志社礼拝堂



竣工当時の礼拝堂内部

礼拝堂が完成する半年前の1885年（明治18）12月18日、同志社礼拝堂定礎式が挙行されました。この時新島は「教育ノ基本ハ宗教ニアリ」、「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者」と述べ、礼拝堂が同志社の象徴的存在であることを示しました。現在も礼拝堂は宗教教育の中心的存在な場を担っています。

<初期同志社のキリスト教と自然科学>



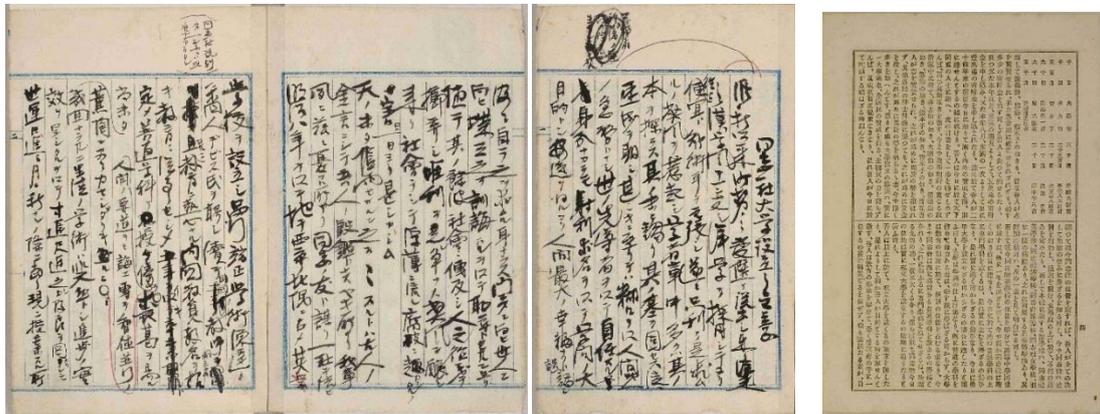
原田直次郎作「山崎為徳肖像画」



山崎為徳著『天地大原因論』

19 世紀中ごろまでは、自然神学がキリスト教と自然科学を強く結び付けていました。自然神学とは聖書のように啓示されたもの以外を通じて、理性的に神の存在を知るという考え方です。よって、法則性が明確な現象、あるいは説明不可能な現象などは神の存在と結びつけて考えられてきました。この関係に一石を投じたのが 1859 年のダーウィンによる『種の起源』、すなわち進化論の発表です。新島が滞在した 1860 年代後半から 70 年代前半は自然神学の影響がまだ残っていました。創立されたばかりの同志社英学校においても進化論と自然神学の関係は論じられていたようです。1878 年（明治 11）には東京大学と時を同じくして John Thomas Gulick を招いて進化論の講義をしています。また、英学校第 1 期生山崎為徳が 1880 年（明治 13）に出版した『天地大原因論』は自然神学を論じたものです。

<同志社大学設立運動>



「同志社大学設立之主意之骨案」冒頭部分（1882 年） 右、大口寄付者の一覧（1888 年） （「同志社大学設立の旨意」所収）

大学設立運動の端緒は、新島が 1882 年（明治 15）に奈良県の土倉庄三郎から法学部設置を条件に 5000 円の寄付の約束を得たときと言われます。その 6 年後、新島らは 1888 年（明治 21）11 月から全国の新聞雑誌に「同志社大学設立の旨意」を発表します。この発表は、1889 年（明治 22）の大日本帝国憲法公布、1890 年（明治 23）の国会開設を直前に迎えた時期でした。「旨意」ではこうした社会状況を前提として、大学教育で目指す人物像を「良心を手腕に運用するの人物」、「自治自立の人民」、「一国の精神となり、元気となり、柱石となる所の人々」、そして「一国の良心」と表現しています。これを可能ならしめるのは、これまでに同志社の各学校で実施され、世間の信頼を得てきた「徳育知育二つながら並行して、決して偏僻なる教育に陥らざる事」としています。

<同志社京田辺会堂（光館・言館）>



言館(KOTOBA-KAN)



光館(HIKARI-KAN)

同志社京田辺会堂は 2015 年 3 月に献堂され、言館(KOTOBA-KAN)と光館(HIKARI-KAN)から成ります。250 人収容の礼拝堂を有する西側の棟は新約聖書・ヨハネによる福音書 1 章 1 節（「初めに言があった」）から「言館」と命名され、「チャペル・アワー」や各種行事で用いられています。ラウンジを持つ東側の棟は旧約聖書・創世記 1 章 3 節（「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった」）から「光館」と命名され、ラウンジでは半期ごとに入れ替わる資料展示により、同志社の歴史と建学の精神を知ることができます。さらに、言館と光館の間には、新島が国禁を犯して大海原を渡ったことを表す「新島裏の海」が配置されています。またこの会堂は、2016 年の第 60 回大阪建築コンクール大阪府知事賞を受賞するなど注目を集め、同志社の歴史に新たな 1 ページが加わりました。

<チャペル・コンサート、キャンパス・コンサート（キリスト教文化センター主催）>



チャペル・コンサート



キャンパス・コンサート

キリスト教文化センターでは、宗教音楽などにふれていただく機会として、内外の演奏家を招いて「チャペル・コンサート」を開催し、学生や教職員だけではなく地域の方などに広く親しまれてきました。また学生の音楽団体による「キャンパス・コンサート」を昼休みに開催し、讃美歌その他の曲を、より気軽な雰囲気の中で楽しんでもらえるように、さまざまな企画に取り組んでいます。

<チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催) >



今出川校地 同志社礼拝堂

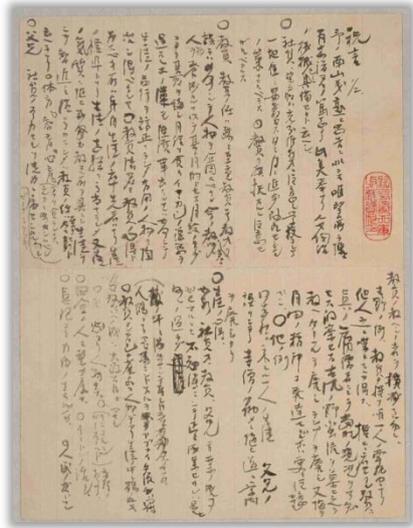
開講期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週 3 回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈祷、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また、教職員の場合には、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけでなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひ気軽にお越し下さい。

展示テーマ

「躍進の地・京田辺」

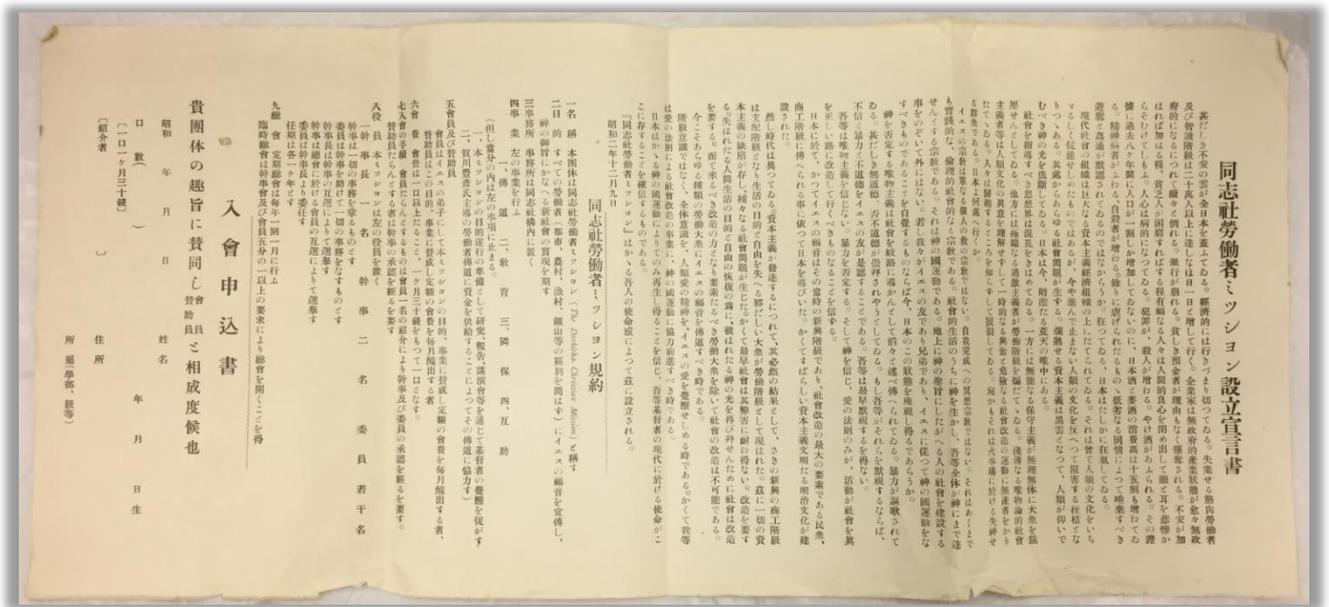
太平洋戦争終了後、1948年（昭和23）に新制大学としてスタートした同志社大学は、高度経済成長期の進学者数の増加に伴い、急速な成長を遂げる反面、その成長に伴う教育施設の狭隘化が問題となっていました。そこで「工学部および大学院工学研究科の教育研究施設、ならびに正課体育施設の整備拡充を計る」ために田辺（現・京田辺）校地が整備され、1986年（昭和61）田辺校地（以下、京田辺校地に名称統一）が開校しました。

ただし、同志社と京田辺の接点はこの時が最初ではなく、新島襄と南山義塾の関係まで遡ります。ここでは、同志社と京田辺の関係を資料で振り返りながら、同志社の GLOCAL について考えます。



新島襄筆祝辞草稿「祝言」(複製) 1882年 1枚 19.7×26cm

南山義塾は農村の子弟の教育を担う私塾で、南山城の自由民権運動の拠点となりました。新島は、1882年(明治15)4月30日に行われた南山義塾の開校式に臨み、祝辞を披露しています。この学校は同志社国際中学校・高等学校の南側にある普賢寺川周辺にあったとされます。



同志社労働者ミッション設立宣言書及び入会申込書(複製) 1927年ごろ 1枚 21.2×47cm

同志社労働者ミッションとは、1927年(昭和2)に教職員で結成された組織で、「すべての労働者(都市、農村、漁村、鉱山等の区別を問わず)にイエスの福音を宣伝し、神の御旨にかなえる新社会の実現を期す」ことを目的としていました。この組織に入会した学生は、卒業後に関西圏の農村部に伝道に行きますが、そのうちの2人が綴喜郡田辺町と綴喜郡草内村(双方ともに現・京田辺市)に赴いています。



「97万㎡に広がる田辺用地—東側から見た用地—」 1980年 1点 25.8×53.3cm

1980年（昭和55）11月に同志社大学整備計画課が発行した冊子『田辺校地について』に掲載されている写真です。撮影は京田辺校地が開校する6年前あたりと考えられます。中央を縦に伸びる道路の先のつきあたりが現在の京田辺キャンパスの正門付近です。当時はまだ道路以外の造成工事は行われていません。



「今出川・新町校地と田辺用地の比較図及び開発区域」 1980年 1点 25.8×53.3cm

同じく冊子『田辺校地について』に掲載されている図です。京田辺校地の建設は、今出川・新町校地だけでは狭隘となった教学条件の改善が一つの理由でした。この図は、今出川・新町校地（総面積80,198㎡、1980年時の表記）の上に、田辺用地（総面積970,073㎡、1980年時の表記）を重ね合わせた図です。



「田辺校地教学施設整備計画」 1984年 1点 25.8×53.3cm

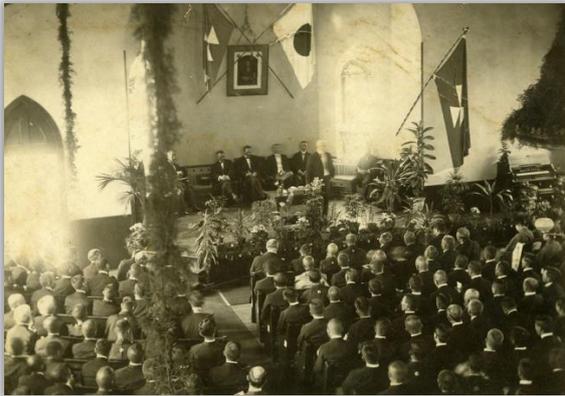
1984年（昭和59）10月に学校法人同志社が刊行した『創立111周年記念同志社田辺新キャンパス整備事業概要』に掲載された計画と1986年（昭和61）4月開校時の完成予想図です。京田辺校地の開校は同志社創立111周年の時でもありました。開校当初は総面積の約79%が開発され、教学施設として利用されることが想定されていたことがわかります。



同志社京田辺会堂の原型となった最優秀作品 2013年 1冊 29.6×41.9cm

京田辺校地のキリスト教主義を象徴する同志社京田辺会堂は、大学京田辺校地の待望の施設として2015年（平成27）3月に完成しました。この設計に当たっては、プロポーザルによる設計提案の審査によって、全応募作品379作品の中から最優秀作品が選ばれ、設計者が決定しました。

<同志社大学の誕生>



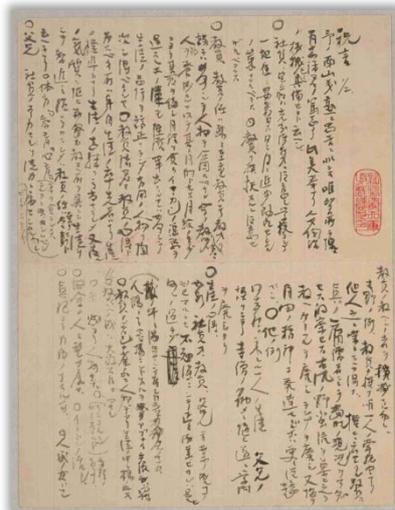
専門学校令による同志社大学開校式 1912年



専門学校令による同志社大学開校記念集合写真 1912年

同志社大学がこの世に初めて誕生したのは1912年（明治45）5月、専門学校令による同志社大学が開校した時でした。この時に盛大な開校式が催されたことが写真からもうかがえます。ただし、この時の大学は文部省が規定する専門学校という位置付けであり、学校制度上最高位に位置する大学という意味ではありませんでした。大学として認められたのは、1920年（大正9）に大学令による同志社大学の開校の認可を受けた時でした。同志社大学は日本で3番目に、明治大学、法政大学、中央大学、日本大学、國學院大學の5校と共に大学設立の認可を受けました。

<南山義塾と新島襄>



新島襄筆草稿「祝言」1882年



南山義塾跡碑

南山義塾は1882年（明治15）4月30日に現在の京田辺の地で開校した私塾です。同志社国際中学校・高等学校南側にある普賢寺川沿いに存在したと考えられます。新島襄は南山義塾の開校式に出席し、祝辞を述べました。その草稿には、教員としてのあるべき姿や、学生の心得、生徒の父兄のあり方が記されており、中には「○体育 ○智育 ○心育」という文字もあります。知育に偏重しない教育の重要性に対する新島の認識は一貫しています。これが同志社と京田辺の最初の接点です。

＜終戦後の同志社大学＞



戦後の風景 1958年



大学入試合格発表日の様子 1975年

太平洋戦争により、日本の大学は大きな痛手を受けました。同志社大学も例外ではありません。終戦時の1945年（昭和20）の学生数は約2,300人で、学徒出陣をはじめ様々な事由で大学を離れる人々が多く、学内は閑散としていたと言われます。その後、日本が復興に向けて歩みだし、高度経済成長期に差し掛かると学生数は大幅に増加し始めます。1955年（昭和30）には約14,000人となり、1975年（昭和50）に同志社が100周年を迎える頃には学生数は約19,400人まで増加しました。この間、長らく同志社の教育を支えた木造建築物はコンクリート建築物となり、教学施設は充実しましたが、激増した学生数に対応する教学施設の狭隘化が深刻な問題となりました。

＜京田辺校地開校＞



開校直後の京田辺校地 1986年



造成工事終了直後の田辺用地 1984年

戦後の学生数急増の影響による教学施設の狭隘化に対して、同志社では1965年（昭和40）頃から対策を考えていました。そして、この年に理事会にて現在の京田辺市での土地買収方針が決定されます。この方針に従い、翌1966年（昭和41）に理事会は土地購入を決定し、同年と1968年（昭和43）の2回に分けて京田辺校地の土地を購入しました。その後、学生運動の影響などで新キャンパスの開校準備は10年近く停滞しますが、1976年（昭和51）頃から京田辺校地の開校準備が始まります。1980年（昭和55）に同志社国際高等学校が開校し、1986年（昭和61）には、大学と女子大学の京田辺校地が開校しました。

<工学部（現・理工学部）の京田辺校地移転>



工学部（現・理工学部）移転直後の京田辺校地 1994年



京田辺校地の理化学館にあるレリーフ

最初の土地の購入から20年後に開校した京田辺校地は、その後も整備が進められました。1988年（昭和63）には同志社国際中学校が開校し、新島記念講堂が竣工するなど、体裁を整えていきました。そして、1990年（平成2）になると、狭隘化が深刻であった工学部の京田辺校地への移転が理事会にて正式に決定します。そして、1994年（平成6）に工学部は大学院を含めて全面移転しました。これにより、「実験・実習、フィールドワーク」を重視する複合的教育拠点、「身体・生命、先端技術、情報」に関する国際的先端研究拠点としての基盤が出来上がりました。

<同志社クローバー祭>



京田辺校地開校30周年記念同志社クローバー祭ゲート2016年



同志社クローバー祭ロゴマーク

同志社クローバー祭は、2005年（平成17）より地域に開かれたキャンパスを目指して始まった、京田辺校地で開催される学園祭です。同年、同志社大学は京田辺市との連携協力に関する包括協定を締結しており、その他、文部科学省より採択を受けた現代GP（けいはんな知的特区活性化デザイン）の提案（2005年）と特色GP（大学コミュニティの創造、2004年）も、開催を後押ししました。以来、今日まで学生と地域で作りに上げる学園祭として続いています。

<オープン・プログラム (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 手話入門クラス



今出川校地 公開講演会

1958 (昭和 33) 年 4 月にキリスト教文化センターの前身である宗教部が主催した 4 つの研究会を基にして、「公開講座」がスタートしました。1981 (昭和 56) 年の国際障害者年を機に「手話」と「点訳」の講座を開設。2010 (平成 22) 年度からは名称を「オープン・プログラム」へと変更し、その後も公開講演会の開催や多様な講座の新規開講などにより、一層の発展を遂げています。これまでの受講生は 9,000 人を超え、学生のみならず市民の皆さんも多数参加されています。開講している講座は、キリスト教文化センターのホームページをご覧ください。
<http://www.christian-center.jp/>

<学生スタッフ活動>



クリスマス・リース作り講習会



チャペル・アワー司会

キリスト教文化センターの多岐にわたる事業を教職員とともに支える存在として、学生スタッフが活動しています。かつては、チャペル・アワーの司会やクリスマス燭火讃美礼拝での聖劇出演などが活動の中心でしたが、これらに加えて、在学生を対象とした「クリスマス・リース作り講習会」の開催、教会の礼拝への参加、SNS を利用した情報発信、フリーペーパー「YES!!!」の発行など、近年そのフィールドは広がっています。学生スタッフの募集は 1 年を通じて行っていますので、関心のある方はキリスト教文化センター事務室までお尋ねください。

<Doshisha Spirit Tour (キリスト教文化センター主催) >



新島襄旧宅 (群馬県・安中市)



熊本洋学校教師ジェーンズ邸 (熊本市)



熊本バンド奉教之碑 (熊本市花岡山)

同志社大学には、建学以来脈々と受け継がれてきたキリスト教主義教育、新島襄の教育理念、そしてその実践といった精神と伝統があります。キリスト教文化センターが主催する **Doshisha Spirit Tour** は、事前学習と現地でのフィールドワークを通じて建学の精神を体感し、同志社を見つめ、自らを省みようとする試みであり、同志社ゆかりの地である「熊本」と「安中・会津」を隔年で訪れています。

熊本は、のちに日本のキリスト教史において「熊本バンド」と呼ばれ、設立当初の同志社を形作った俊才たちを生み出した土地。安中は言うまでも無く、新島襄の祖父の地(安中藩)であり、会津は同志社草創期に新島の「同志」となった山本覚馬、そして新島の妻・八重を育んだ地です。

資料リスト

資料名	作者・著編者	年代	法量(cm)	員数	所蔵先
展示テーマ「発展の地・今出川」					
寄宿舎部屋割図(複製)	新島襄	1870年代後半	24.5×53.2	1巻	同志社社史資料センター
自責の杖(複製)	-	明治時代	最大60	3点	同志社社史資料センター
新島襄旧蔵聖書(複製)	-	年不祥	21×14	1冊	同志社社史資料センター
横田安止宛新島襄書簡(複製)	新島襄	1889年11月23日付	18×169	1通	同志社社史資料センター
大学令による同志社大学設立認可証(複製)	中橋徳五郎	1920年4月15日	27.8×19	1枚	同志社社史資料センター
展示テーマ「躍進の地・京田辺」					
新島襄筆祝辞草稿「祝言」(複製)	新島襄	1882年	19.7×26	1枚	同志社社史資料センター
同志社労働者ミッション設立宣言書及び入会申込書(複製)	同志社労働者ミッション	1927年ごろ	21.2×47	1枚	同志社社史資料センター
「97万㎡に広がる田辺用地—東側からみた用地」『田辺校地について』所収	学校法人同志社	1980年	25.8×53.3	1点	同志社社史資料センター
「今出川・新町校地と田辺用地の比較図及び開発区域」『田辺校地について』所収	学校法人同志社	1980年	25.8×53.3	1点	同志社社史資料センター
「田辺校地教学施設整備計画」『創立111周年記念同志社田辺新キャンパス整備事業概要』所収	学校法人同志社	1984年	25.8×53.3	1点	同志社社史資料センター
同志社京田辺会堂の原型となった優秀作品	「同志社大学 京田辺キャンパス礼拝堂および関連施設設計提案協議」事務局	2013年	29.6×41.9	1冊	同志社社史資料センター

写真リスト

ポスターパネルタイトル	写真・画像	年代	所蔵先
展示テーマ「発展の地・今出川」			
幕末の今出川周辺	「文久改正新增見京絵図大全」	1863年	国立国会図書館デジタルコレクション
開校当初の今出川キャンパス	今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮 薩摩藩邸跡碑	1870年代後半 現代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
明治20年代の今出川キャンパス	明治中期の今出川キャンパス ハリス理化学校開校日の今出川キャンパス	1880年代 1890年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社礼拝堂	竣工当時の同志社礼拝堂 竣工当時の礼拝堂内部	1880年代か 1880年代か	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
初期同志社のキリスト教と自然科学	山崎為徳肖像画 『天地大原因論』	年不祥 1880年	同志社社史資料センター 同志社大学人文科学研究所
同志社京田辺会堂(光館・言館)	言館(KOTOBAKAN) 光館(HIKARIKAN)	現代 現代	キリスト教文化センター キリスト教文化センター
同志社大学設立運動	「同志社大学設立之主意之骨案」	1882年	同志社社史資料センター
チャペル・コンサート、キャンパス・コンサート	チャペル・コンサート キャンパス・コンサート	現代 現代	キリスト教文化センター キリスト教文化センター
チャペル・アワー	今出川校地 同志社礼拝堂	現代	キリスト教文化センター
展示テーマ「躍進の地・京田辺」			
同志社大学の誕生	専門学校令による同志社大学開校式 専門学校令による同志社大学開校記念集合写真	1912年 1912年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
南山義塾と新島襄	新島襄筆祝辞草稿「祝言」 南山義塾跡碑	1882年 不詳	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
終戦後の同志社大学	戦後の風景 大学入試合格発表日の様子	1958年 1975年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
京田辺校地開校	開校直後の京田辺校地 造成工事終了直後の田辺用地	1986年 1984年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
工学部(現・理工学部)の京田辺校地移転	工学部(現・理工学部)移転直後の京田辺校地 京田辺校地の理化学館にあるレリーフ	1994年 現代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社クローバー祭	京田辺校地開校30周年記念同志社クローバー祭 ゲート	2016年	学生支援センター
オープン・プログラム	同志社クローバー祭ロゴマーク 京田辺校地 手話入門クラス 今出川校地 公開講演会	現代 現代 現代	学生支援センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター
学生スタッフ活動	クリスマス・イルミネーション点灯式 クリスマス・リース作り講習会 チャペル・アワー司会	現代 現代 現代	キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター
Doshisha Spirit Tour	新島襄旧宅(群馬県・安中市) 熊本洋学校教師ジェーンズ邸(熊本市) 熊本バンド奉教之碑(熊本市花岡山)	現代 現代 現代	キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第 13 期展

「同志社の GLOCAL—京田辺とのあゆみ—」

編集：同志社大学同志社社史資料センター

発行：同志社大学キリスト教文化センター

発行日：2021 年 9 月 17 日

©Doshisha Archives Center and Center for Christian Culture